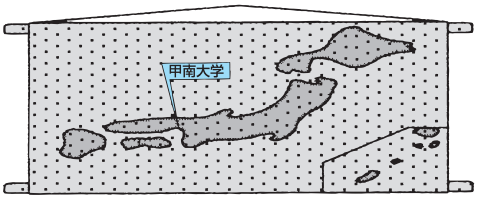
甲南大学・国際言語文化センター報　VOL.30 NO.3 2023

Zephyr

ゼフィール・にしかぜ

〈第86号〉



https://www.konan-u.ac.jp/kilc

《特集＊日本語に入った面白い外国語表現》

★所長からのメッセージ：カタカナ語について …… 佐藤　泰弘 …… 2
〔フランス語〕ギロチンとミルフィーユ …… 中村　典子 …… 3
〔中　国　語〕京都の家・まちの守り神になった「鍾馗さん」…… 胡　金定 …… 4
〔韓　国　語〕日本語にみる韓国との交流の名残 …… 金　泰虎 …… 5
〔日　本　語〕「バナナが売っている」という新しい文法表現の広がり …… 谷守　正寛 …… 6
おすすめの本 …… 7
世界の有名な研究所（５） …… 谷守　正寛 …… 8

甲南学園創設者
平生釟三郎

「世界に通用する
紳士・淑女たれ」

Zeitschrift für Sprach- und Kulturforschungen
LANGUAGE AND CULTURE
語言与文化
언어와 문화
Etudes des langues et cultures

「英語＋１（第２外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年３回刊行）

異文化を知るためにはその文化圏の言語を知ること

使っている言語が認知や思考に影響を与えます。例えば、日本語話者と中国語話者と韓国語話者ではそれぞれ思考や世界観、価値観が異なります。いわゆる言葉の違い＝思考の違いということです。ですから、異文化を知るためにはその文化圏の言語を知らなければなりません。

近代になって、世界的に交流が盛んになってきました。人的な交流により、相手のことばを表現できない場合、そのまま相手のことばの発音と意味を自分のことばに取り入れるようになったことが多く見られます。

「漢字」という表意文字をはじめ、日本語は古くより中国語から多くの語彙を学びながら発展してきましたが、中国語も日本語からたくさんの語彙を取り入れて、現在でも使われています。代表的なものには「文化」、「科学」、「経済」、「健康」などがあります。

また、現代になって、日本語に入ってきた中国語の発音をカタカナで表記する語彙も見られます。例えば「饺子(jiǎo zi)＝ぎょうざ」、「乌龙茶(wū lóng chá)＝ウーロン茶」、「炒饭(chǎo fàn)チャーハン」、「辣油(là yóu)＝ラー油」、「拉面(lā miàn)＝ラーメン」、「皮蛋(pí dàn)＝ピータン」、「麻将(má jiàng)＝マージャン」などなど。

日本独特の文化を外国人に伝えて、英語などの言語で日本語由来の語彙が使われ、世界中で知られている日本語は多くあります。例えば、「sukiyaki すき焼き」、「tempura 天ぷら」、「kabuki 歌舞伎」、「ukiyo-e 浮世絵」、「sumo 相撲」、「karate 空手」、「kawaii かわいい」、「manga 漫画」、「karaoke カラオケ」、「zangyo 残業」、「kanban system カンバン方式」などなど。

言語が与える思考への影響は、決して小さなものではありません。そのため異なる言語を学ぶことは、異なる文化を学ぶということにつながります。新たな思考方法を獲得するために、母国語とは違った言語体系を学ぶことも面白いでしょう。多くの外国語を学ぶことを通して、外国人とのコミュニケーションの円滑化や異文化理解のヒントにもなります。　（胡　金定）

カタカナ語について

全学教育推進機構長・国際言語文化センター所長　佐藤　泰弘

今回のテーマである「日本語になった外国語」に接して、最初は「カステラ」など古い時代にヨーロッパから伝わった言葉を紹介しようと考えたのですが、どうもしっくりきません。このテーマは純粋な日本語が存在することを前提にしているわけではないはずです。日本語の語彙は色々な言語から取り入れた言葉によって豊かになり、変化してきたのですから。あれこれ悩んだ末に、日本史を学んでいるので、日本語の文字から書き始めてみたいと思います。

大雑把に言うと、文字を持たなかった古代の日本に中国から漢字がもたらされ、万葉仮名を経て、日本語の話し言葉（歌とか）を書き留めるために平仮名が生まれ、仏典・漢籍等を読むために片仮名が生まれました。漢文の訓読から生まれた漢字仮名交じり文が現代の日本語表記の基本となり、漢字・片仮名・平仮名だけでなく、今ではローマ字も使われています。この多様な文字表記も手伝って、「日本語になった外国語」は身の回りに溢れています。

私たちが使っている語彙のうち、漢字で書く言葉の多くは日本語になった中国語です。しかし漢字で書かれた言葉がすべて中国語に由来するかというと、そうではありません。柳父章『翻訳語成立事情』（岩波新書　1982 年）によると、明治時代に西洋の言葉を翻訳するため、当時の知識人によって色々な言葉が創られました。「社会」や「個人」など、私たちが日常的に使っている言葉には、翻訳語に由来するものが多いのです。

明治時代には欧米の概念を移植するため漢文の教養をもとに翻訳語が生み出されました。しかし現代は漢文の素養が風前の灯火で、外国語を漢字の熟語に置き換えるという高度な技能はほとんど失われています。わざわざ外国語を漢字の熟語にしなくても、日本語には片仮名という、とても便利な道具があります。「パラダイム」でも「ジェンダー」でも、発音を写して日本語に組み込むことができます。

甲南大学で教えるようになって間もない頃、今となっては 20 年以上も前ですが、知り合いになった経営学部の先生２人と雑談をしていた時、２人が専門の話を始めました。何の話題かは覚えていませんが、「リスクをヘッジして」という感じです。僕がポカンと聞いていると、その１人が「英語だけで話ができている！」と、驚いていたのを思い出します。これは極端かもしれませんが、片仮名を使って外国語の語彙を日本語に組み込むのは、よくあることです。

片仮名の面白いところは、外国語風の語彙を生み出せることです。私が子どもの頃は「テレビで野球のナイターを見る」という言い方が一般的でした。この「ナイター」は和製英語であり、英語では「ナイト･ゲーム」が正しいという理由で、使われなくなりました。しかし「ナイター」が「night game」を翻訳した日本語であると考えれば、英語の語彙に照らして正誤を判断しなくても良かったのかもしれません。

カタカナ言葉は、日本語の外の言葉を移植するには便利ですが、注意も必要です。外国語の言語体系における意味、つまりその語彙が社会的に持っている含意や背景を理解することなく使ってしまい､理解したようになっている危険性もあるからです。よく耳にする「ビジョン」「コンプライアンス」「ガバナンス」などは、英語における意味と同じでしょうか。「グローバル・スタンダード」と言うのなら、そのあたりの思慮が必要かもしれません。

とはいえ、日本語になった外国語が、その外国語の本来の意味から離れていたとしても、日本語という範囲だけで考えるならば問題はないし、それはそれで面白いのだと思います。５世紀ころに中国の文字表記とともに中国の語彙が伝わって、日本というか倭国の言葉は、それまでになかった概念を持つようになりました。それと同じことが、外国語をカタカナで表記することで日本語に起こっているのかもしれません。

ギロチン（guillotine：ギヨチン）と ミルフィーユ（millefeuille：ミルフイユ）

国際言語文化センター兼任研究員　中村　典子

ある言語の単語が別の言語にそのまま取り入れられた場合、**借用語（フランス語：emprunt, 英語 loan word）**と呼ばれ、もとの言語の発音が維持されない場合があります。ここでは、皆さんが耳にしたことのあるフランス語由来の２つの単語について説明します。

※　　※　　※

フランス革命時に処刑に使われた guillotine は、フランス語の発音では［gijɔtin］であり、カタカナで表記すると「ギヨチン」に近いのですが、英語を経由したためか（英語の発音では［gɪləti:n］と l を発音）、ギロチンという発音が日本で広まったと思われます。というのは、日本語は、もとの言語の発音を尊重にする傾向があるからです。たとえば、Paris も restaurant もフランス語の発音規則に従い、最後の子音字の s を発音せず、パリ、レストランと言いますね。英語では両方とも s を発音します。さて、ギヨチンという器具の名称は、医師で政治家であった**ジョゼフ・ギヨタン**（**Joseph Guillotin**, 1738-1814）の名前に由来します。処刑時の苦痛を少しでも和らげるため、議会に断頭台を提案したことで、本人の意に反して彼の名前が残ってしまいました。ギヨチンは 13 世紀ごろから存在し、ギヨタンが発明したわけではありません。貴族階級の処刑には、昔からこの方法が使われ、平民は絞首刑だったようです。フランスでは、1792 年から 1977 年 9 月 10 日の死刑廃止まで公的にギヨチンが使用されました。ルイ 16 世もマリー・アントワネットも、ダントンもロベスピエールも断頭台に消えたことはよく知られています。フランスにおける死刑廃止は、社会党の**フランソワ・ミッテラン大統領**（**François Mitterrand**, 1916-1996）が公約を果たすべく、法相に任命した弁護士の**ロベール・バダンテール**（**Robert Badinter**, 1928-）が提案し、**1981 年 9 月 30 日死刑廃止法案が可決**されました。なお、日本でも多くの翻訳書が出ているフェミニスト作家のエリザベット・バダンテール（Élisabeth Badinter, 1944-）は彼の配偶者です。

※　　※　　※

ケーキ屋さんでは「ミルフィーユ」というフランス菓子が陳列されていることがあります。フランス語の発音と少しだけ異なっているので説明します。フランス語では millefeuille の発音は［milfœj］で、カタカナで表記すると「ミルフイユ」か「ミルフォイユ」に近いのです。「ミルフィーユ」とほとんど変わらないと感じるかもしれませんが、後者の発音では mille filles となり、「千人の女の子」となってしまうため、フランス語圏に行った際は注意してください。millefeuille とは、mille が千枚、feuille が葉なので「千枚の葉」という意味になります。この菓子の原形は、右の写真にあるように、三層の折パイの間にクリームを挟んで千枚の葉に似せた形でした。フランス語のあるサイト[1]の説明によれば、millefeuille は 1806 年に最初作られ、その後、1867 年に Sergent という菓子店が商品として広めたようです。三層の折り込みパイ生地の間にカスタードクリームが挟み込まれ、表面に粉砂糖がかかっているか、糖衣がけされているものが基本ですが、苺を挟んだものなど、さまざまなバリエーションがあります。

millefeuille（iStock.com/ Cyril Aucher）

注 1 〈https://www.edelices.com/medias/origine-millefeuille〉

京都の家・まちの守り神になった「鍾馗さん」

国際言語文化センター兼任研究員　胡　金定

屋根の上に飾られている鍾馗立体瓦像

京都市内の民家京町家（きょうまちや）を歩いていると、軒の上にちょこんと中屋根に置かれている20cmほどの小さな飾り瓦の人形をしばしば目にします。この瓦人形は髭面の厳しい顔で剣のようなもの持ち、長靴を履き、憤怒の表情で空を見上げています。地元では「鍾馗（しょうき）さん」と親しみを込めて呼ばれています。

飾り瓦人形の鍾馗さんは京都市内に3000体をくだらない数が現存していると言われています。特に清水や西陣界隈では一体一体違っている鍾馗さんの立体像の瓦人形が立ち並んでいて、新築のマンションにもさりげなく置かれていたりします。

鍾馗は中国の唐代に実在した人物です。ある時、唐の開元年間（713～741年）６代皇帝玄宗が瘧（おこり）にかかり床に伏せた時、夢の中で、「虚耗（きょこう）」という小鬼が皇帝を悩ませました。そこへ破帽子をかぶり、角帯をつけ長靴をはいた髭面の大鬼の姿の鍾馗が現れ、あっという間に小鬼を食べしまいました。

玄宗皇帝が大鬼に正体を尋ねると、「私は終南県出身の鐘馗と申します。武徳年間（618～626年）に科挙の試験に失敗し、国に帰るのを恥じて宮中で自殺した。だが唐の初代皇帝李淵（りえん、566～635年）は自分を一定以上の身分の役人しか着られない緑色の服（緑袍）を着せて手厚く葬ってくれたので、その恩に報いるためにやってきた」と告げました。

不思議にも夢から覚めた玄宗皇帝の病はすっかり治っていました。そこで、玄宗皇帝は自分が夢で見たままの鐘馗の姿を唐代玄宗朝に仕えた著名な画家の呉道玄に命じて鍾馗の絵姿を描かせ、災厄を祓う守り神としました。

玄宗の時代から臣下は鍾馗図を除夜に下賜され、邪気除けとして新年に鍾馗図を門に貼る風習が生まれました。宋代になると、年末の大儺にも貼られるようになり、17世紀の明代末期から清代初期になると端午の節句に厄除けとして鍾馗図を家々に飾るようになりました。以来、中国で鬼を退治したという伝説の英雄で、疫病を祓い、魔を取り除く効果のある道教の神様として鍾馗は祀られるようになり、日本では室町時代から信仰され、江戸時代には武者人形に取り入れられました。

平安時代（794～1185年）頃から京都では今でも病の退散の為に町家の軒先に瓦製の鍾馗さんの像が祀られています。その容姿から、強い者の象徴ともされ、端午の節句の幟などに鍾馗の像が画かれるようになりました。

鍾馗の画像は中国では古くから年越しの魔除けとして用いられ、日本でも室町時代から水墨画の画題として好まれました。江戸日本橋の染物屋の家に生まれ幼少期から絵を描くことを好んでいた歌川国芳（1797～1861年）は12歳で《鍾馗提剣図》を描いたことにより、絵の才能が認められ、人気絵師であった歌川豊国（1769～1825年）に15歳で弟子入りし、世界的な浮世絵師となり、名が知られるようになりました。

中国の鍾馗絵画

日本の鍾馗立体瓦人形

日本で唯一、鍾馗さんをまつる神社

日本では民間信仰のひとつとして、主に京都や奈良の町家の小屋根などに鍾馗さんの焼き物が置かれるのが一般的です。向かい合わせの屋根の鬼瓦や同じ鍾馗から弾かれた邪気を払ってくれる、町家の小さな守り神とされています。

京都若宮八幡宮には、陶祖人・椎根津彦命（しいねつひこのみこと）が祀られている陶器神社があり、瓦からできている鍾馗も同じ焼き物であることから、京都市内唯一の場所として若宮八幡宮宮司の協力のもと建立されました。御神体の鍾馗は災い除けとして鬼門の方向である北東に向けて安置されています。

古くからの京町家が多く残る五条坂は清水焼発祥の地として知られ、鍾馗さんを正式に神格化して崇め、鍾馗さんも瓦から作られた焼き物であることにちなみ、2013年に「鍾馗神社」が建立され、そして鍾馗祭りが実施されました。「鍾馗神社」は陶祖神・椎根津彦命（しいねつひこのみこと）をまつる「陶器神社（若宮八幡宮社）」の末社です。鍾馗さんをまつる神社は日本でここだけです。

また、毎年７月11・12日に、愛媛県松山市に鎮座している鐘馗寺で開催されている鍾馗祭りは松山三大夏祭りの一つに数えられています。毎年、全国から多くの参拝者で賑わいます。

日本語にみる韓国との交流の名残

国際言語文化センター兼任研究員　金　泰虎

古代から現在に至るまで、絶えず大陸から日本、また韓国から日本、逆に日本から大陸と韓国へ言葉が伝わっています。人間社会が異なる集団との交流を行う限り、互いの文化、とりわけ言葉は相互に影響を与え続けることでしょう。

日本には大陸から伝わった漢字をはじめとする表記や表現の痕跡が残っており、また韓国の言葉も多く伝わっています。逆に、日本から大陸と韓国にもたらされた言葉も多く確認することができます。つまり、異なる社会や集団の言葉が相互に伝わり、自分の社会ないしは集団には都合の良い語彙が残ります。その伝わった言葉が社会や集団に残る原因は様々ですが、現在、日本社会に残されている語彙の中で韓国から伝わったごく一部の単語を中心に述べて行きたいと思います。

日本では近代国民国家成立期を皮切りに近代的国語辞典が作られ、「外来語」という形で外国から伝わった語彙を取り入れて掲載しています。時代が下るにつれ、ことに国境を越えた人々の交流が盛んになるグローバル化時代を迎えますと、諸外国から多くの言葉がもたらされます。日本では、この時勢に応じて外来語の選定も増やしていますが、外来語は別称としてカタカナ語とも言われます。その理由は、外来語は概ねカタカナで表記するからです。

ところで、海外から言葉が伝わり、日本社会で使われるからと言って、すべてが外来語としては認められているわけではありません。日本では出版社ごとの方針に基づき、外来語を選別して国語辞典に掲載していますが、その外来語の表記は国立国語研究所が提示している規則に沿っています。

日本社会では韓国から伝わった語彙が外来語として辞書に掲載されている語彙がある反面、外来語として認定されず一部の地域に留まっている語彙もあります。そこで、韓国から日本に伝わっている語彙の事例として前者は外来語の「チョンガー」、後者は一部地域での「チング」を取り上げることにします。

日本においてカタカナで記すチョンガーは漢字で表記をすると、日本の簡体字は「総角」、繁体字は「總角」と記しますが、「未婚の独身青年」という意味です。総角の初見は中国の『詩経』であり、中韓日の社会で共通にみる語彙です。つまり、中国の簡体字は「总角」[Zongjiao]、そして韓国では「總角（총각）」[Chong gak] です。一方、日本では「チョンガー」[Chong ga－]、その音読みは「総角（そうかく）」[So kaku] なのです。言語学専門家の視点ではなくても日本のチョンガー [Chong ga－] という外来語は、韓国の總角（총각）[Chong gak] からの影響であることに気付くと思いますが、専門家は韓国から伝わった語彙であると指摘しています。

しかし、後者の日本の「チング」は、チョンガーという外来語とは異なり、一部の地域だけに使われている言葉です。つまり、長崎県や山口県、とりわけ五島列島や壱岐・対馬辺りで「仲の良い間柄」という意味合いとして使われています。韓国でのチングとは、友だち、つまり友人の意味ですが、日本でもほぼ同じ意味として用いていると言えます。ちなみに、長崎県は韓国に一番近く、そして山口県は日本の植民地支配期にその県民が一番多く韓国に渡って暮らしていました。

韓国の「チング（친구）」は漢字表記では「親旧」ですが、友人の意味です。韓国では「우인（友人）」という単語もありますが、文語体に当たる語彙です。なお、韓国の伝統的な語彙の友人は「동무（ドンム）」です。しかしドンムの語彙は、韓国ではほとんど死語に近い状況です。その理由はコリア半島が韓国と朝鮮民主主義人民共和国に分断され、朝鮮民主主義人民共和国が革命や志を同じくする人の意味合いとして使われるようになり、韓国では使わなくなったためです。

このように、日本のチョンガーという語彙は外来語として国語辞典に掲載され、全国レベルの語彙になっている一方、チングは全国レベルではなく国語辞典にも掲載されず一部の地方に留まっている言葉です。しかし、前者のチョンガーは外来語として指定はされているものの、この語彙を知らない人が多く、後者のチングは全国レベルの外来語ではないですが、一部の地域で未だによく使われている言葉なのです。

「バナナが売っている」という新しい文法表現の広がり

国際言語文化センター兼任研究員　谷守　正寛

日本語研究の立場からは日本に入った外国語でなく、勝手ながら日本語の表現で近年耳にするようになった新しい文法形式を紹介することにします。それは数千年の日本語史の中でなんとここ数十年で徐々に定着しつつあるという、しかも文法形式ですから滅多に出会えない現象です。語はいくらでも変化したり新語として作られ、発音は口や鼻の使い方で方言のようにすぐに変化しますが、文法形式は数千年前に分かれた韓国語とも未だに似た部分が共有されるように非常に変化しにくいものです。さて、ここで挙げるのは「バナナが売っている」という表現形式です。

右は筆者が撮ったNHKの料理番組（2023年7月21日）の画面ですが、字幕に堂々と「バナナが売っている」と打っています。日本語の文法は、日本語話者なら誰でも少し考えると比較的分かりやすくて頭の体操にもなって面白いと思うので、先行研究をまじえて紹介しましょう。

「～がVtて＋ある」という形式ではVt（＝他動詞）の後に「ある」が来ます。例えば「お茶が入れてあります」のように、他動詞「入れる」と「ある」を使います。これはふつう誰かがお茶を入れたのを見て言う表現です。話し手が自分で行った結果を言う場合は「～をVtテ＋ある」という形式で「お茶を入れてあります」のように「が」を「を」にします。さらに、自動詞Viを使って「～がViて＋いる」という形式で「お茶が入っています」と言う場合は、「入る」は自動詞で、お茶を入れたという人間の所作よりもお茶の入った状態だけを述べていて、話者がお茶を相手のために入れたとしても、私が入れてあげたという押しつけがましさもなく聞こえます。最初の「お茶が入れてあります」は誰かが入れたのだろうからやや不審な感がして、お茶を勧める場合には適当ではないでしょう。

さて、「売る」は他動詞ですから、「バナナが売っている」は上の言い方のどれにも当てはまらない新しく奇妙な形式だと分かります。つまり、「～がVtて＋いる」という形式になり、本来存在しなかった要素の組み合わせになるわけです。これはまずは特に「売る」に関して広がっているようです。不思議ですね。ある研究では、「売る」が自動詞のように変化したという考察があります。つまり、お茶が入った状態を指して言う「お茶が入っている」に近い形式をとっているというわけです。その理由としては、「売る」という動詞はお金を払って所有権を移す段階で使う「買う」の反対の意味を持つ場合と、まだ買われていなくても店先に商品を置いているだけでも使われる場合があり、後者の場合に「売っている」が、お茶が入っていると同様に、商品が並んでいる状態だけを表す自動詞のようになっているというわけです。たしかに、お金の支払いがなくても「売っている」と言えるのに、「買っている」とは言えませんね。

さて、ところが、「バナナが売られています」も言えるはずなのに、どうしてわざわざ他動詞を自動詞に使うなどという無謀なことが許されるのでしょうか。「売られる」こそ自動詞的な表現ですから。その理由まではしっくりと解明されていないので筆者も考察しました。目処が付いたので別の場所で発表します。解答を示さずに問いかけだけされると、日本語の問題だけに気になる人は気になるかもしれませんが、興味のある方はご覧ください。

参考：田川拓海（2002）．疑似自動詞の派生について－「イチゴが売っている」という表現－、筑波応用言語学研究９．

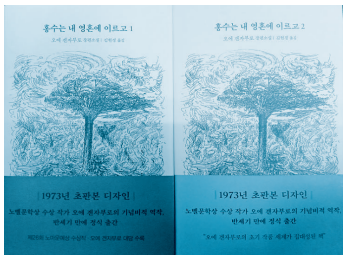
『洪水はわが魂に及び』（大江 健三郎）

訳者 김현경『홍수는 내 영혼에 이르고１・２』（은행나무、2023 年、韓国）

1973 年、大江健三郎（1935 ～ 2023）が書いて野間文芸賞を受賞した小説の『洪水はわが魂に及び』が韓国で韓国語訳され、『홍수는 내 영혼에 이르고（ホンスヌン ネ ヨンホネ イルゴ）』という題名のもと、２冊（１・２）で出版されました。2023 年７月、김현경（キムヒョンギョン）が翻訳を行い、은행나무（ウンヘンナム）という出版社が刊行しています。

大江健三郎は 1994 年にノーベル文学賞を受賞しており、日本では誰もが知っている作家であると言えます。氏は日本社会の抱える問題点を鋭く指摘し、人間の共生を力説するなど「行動する日本の良心」とも言われました。2023 年３月に逝去していますが、同年の７月に韓国で翻訳本が出版されたことは不思議な気がします。しかも 1973 年の作品、つまり発表から半世紀を経た時点での翻訳出版とは、文学作品は時空を超越したものであることを改めて知らしめられたと思います。

この小説では、核戦争の危機が高まる世界情勢の中で、知的障碍をもつ子どもとその父親が社会から遮断されたような生活をしています。そのような中で、この子どもはある社会的に不良青年とされる若者と出会い、その父親は本当に人間の存在を脅かすものは何かを考えるようになります。社会の経済的弱者としての青年、核戦争、核汚染など今日、我々が直面している様々な問題を予言しているかのようなストーリーが展開されています。言い換えれば、この小説では作家の若い頃の生き様と理念が集約されており、人間の共生という大きな問題意識が垣間見られます。



他界された作家の小説ではありますが、作品の出版から 50 年後に接する韓国の読者に直接語り掛け、作家の内面世界の理解へ導いてくれると思います。（金 泰虎）

マインド・タイム 脳と意識の時間（ベンジャミン・リベット、下條信輔訳） 岩波書店

書評はいくつもありますので、本の紹介に加えて紹介者なりのコメントも気ままに述べようかと思います。さて、例えばあなたが塩ラーメンを食べるぞ！と思ったその時に、自分の自由な意志で塩ラーメンに決めていると自分では思うでしょうか。実はそれが違っていて、自由に物事が決められると思っている意志というものが、そう思った瞬間の 500 ミリ秒前に自分の意識とは別の脳内を中心とするさまざまな情報から神経ネットワーク上で創発されて、そういう決定に至っているということを実験的に明らかにした衝撃の書がこの『マインド･タイム』です。

自分で決めたと思っていても実は自分の意志と関係のなさそうな情報としては、先天的な遺伝子の構成、経験・学習による記憶や神経ネットワークなどの後天的な要素、体調も含めた環境などが考えられます。塩なんかはけっこう単純に血中の情報からもくるでしょう。なお、陸上選手がスタートの合図を聞いたような場合は意識が創発される前の合図後 150 ミリ秒程度後に反応できます。でなければ交通事故がもっと多発するでしょう。「脳の活動は遅延する意識事象に先行する」（p.124）ということを実証していて、決意や判断とは意識的に自分の自由意志で決めたつもりでも、「自分」以外のところからすでにそう決められていたということになり、人間の自由意志の根幹を揺るがすほどの知見です。（谷守 正寛）

文化庁とその日本語の調査から

国際言語文化センター兼任研究員　谷守　正寛

研究所の紹介ということで、筆者の立場からは日本語に関するところになりますが、まず、国立国語研究所が挙げられます。「ことば研究館」という親しみやすい場所もありますが、筆者自身行ったこともなく、読者の方も訪れる機会はそうないでしょう。そこで、その附属機関となると同時に設置された文化庁についてお話しする方が、今やネットで訪問すれば面白い情報にふれる機会も得られるので有用かと思います。文化庁はいわば総本山です。国語研究所の言語資源も自由に利用できるのですが、文化庁の情報が親しみやすいでしょう。難しい話よりも日本語の身近な情報を介して研究組織の紹介とします。

文化庁には文化審議会国語分科会があり、統計・調査研究として「国語に関する世論調査」を行い、常用漢字にも関わっています。テレビでも聞いたことがあると思いますが、そこから選んだ身近な日本語のトピックを取り上げることで、研究調査組織としての活動を具体的に紹介することにしましょう。

令和２年度の調査からですが、普通「来れますか」と言う人が10代で70％、70代では「来られますか」と言う人が58％と真逆の結果になっています。これはら抜き言葉と呼ばれますが、同じく、「見れた」ではもっと極端で、10代では83％が使うのに対し、70歳以上では「見られた」を使う人が64％と逆転するものの、50代以下では「見れた」の割合が半数を超えています。さて、「食べれない」と言う人が10代で60％いるのに対し、30代で逆転し、70代では「食べられない」と言う人が75％もいますが、これを時代別に見ると20年で前者が５％増えています。一部の高齢者の方はけしからん！と思うこうした言葉もこのように数十年単位で徐々に許容されていきますが、そうなると、今の10代の人が高齢になる頃にはら抜き言葉が正しい表現だと認められるのでしょう。それを決める根拠を示すのも文化庁の仕事です。

もう少し文法の誤用の広がりを知る調査（令和３年度）をご紹介します。「すごい」を副詞的に使う連用形は「すごく」ですが、「すごく速い」を「すごい速い」と言うことがある人の割合が10代から40代まで実に70％を超えています。「あの人みたいになりたい」を「あの人みたくなりたい」と言う人が30％前後、「そうではなくて」を「ちがくて」と言う人は30代まで各世代とも40％を超えます。「みたい」も「ちがう」も形容詞ではないですが、それぞれ形式的、意味的に形容詞のように使っています。これらも若い世代が歳を取ると大勢を占めるようになり、正式に認められる可能性がありそうです。規範的文法からみて間違っていても矯正するのではなく、使用の実態を調査してありのままに言葉の変化を許容する姿勢で情報提供しています。

さて、ついでながら間違えそうな語で調査されたものを紹介します。令和４年度の調査から、「忸怩（じくじ）」とは自分のしたことを心の中で恥ずかしく思うさまを言いますが、「忸怩たる思い」の意味を「残念でもどかしい思い」だと思っている人が３割を超えたり、「情けは人のためならず」の意味を50代以下の層では、本来の意味「人に情けを掛けておくと巡り巡って結局は自分のためになる」を上回って、「人に情けを掛けて助けることは、結局はその人のためにならない」と思っていることが分かりました。若い人ほど他人を思いやって文字通りそう解釈するのでしょうが、情けが実は自分のためだったとは少し衝撃でしょうか。このような言語調査の資料がネット上で身近に見られるので、単なる研究所の紹介を超えて、いつでも訪問することで楽しめます。検索語は「国語に関する調査」です。おまけですが、「鬱」は29画もの画数を持つ難しい漢字ですが、意外なことに、通常はかなで書かれる「常用漢字」に2010年に選ばれました。こうした常用漢字を決めるのも国語分科会の仕事です。

甲南大学・国際言語文化センター報『ZEPHYR』　第30巻　第３号（通算86号）　2023年12月１日
編集・発行　甲南大学・国際言語文化センター　神戸市東灘区岡本８丁目９番１号　電話(078)435−2326